

(c) 今回の検討テーマの一つであった支間比の異なる主桁複合形式の2タイプ (Type-2.6) で大差のない結果が得られたこと、また主桁が鋼か複合形式かによっても動的な影響が少ないことから、実施設計段階での個々の対処 (伸縮装置等) により静的解析での結果をもとに支間割、各部構造材の仕様区分等を決定しても実用上大きな問題はないと考えられる。

6. 今後の課題

(1) 解析モデル、解析条件

主桁の支持・拘束条件については、すべて水平固定として検討したが実施設計においては反力分散、水平変位、温度応力の低減等を目的に主桁の支持方法をバネ、ダンパー等の弾性拘束を含めて検討する必要がある。

また、今回対象とした複合斜張橋では減衰定数を鋼: 0.02、コンクリート: 0.05として運動エネルギー分担比で検討を進めてきたが、実際の複合構造物における構造減衰をどう推定するか実験等を含めての検討が今後の課題の一つである。

(2) その他

今回の動的解析は、昭和60年度の静的解析で対象としたモデルをベースに上部構造を主体に橋軸方向の地震に関する動的解析を行ったが、実施設計においては橋軸直角方向の検討を含め、下部工 (基礎地盤) の影響を含めた全体構造系としての検討が必要となる。